

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	商学部
大項目	4 教育研究組織
中項目	
小項目	4.0.1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
要素	教育研究組織の編制原理 理念・目的との適合性 学術の進展や社会の要請との適合性 (KG1)研究活動の状況
小項目	4.0.2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. アドバイザリー・パネル制度を改編する。	→2005年度末に制定されたアドバイザリー・パネルに関する内規の改善内容(委員の人数、任期、資格、役割の明確化などの再検討内容)を行うための会議開催回数。	C	C	C	D	D
2. 学部の使命・目的に照らして商学部の教育研究組織が妥当であるか否かに関して、継続的に検証する。	→妥当性の常時継続的検証のための会合開催回数。	B	C	C	B	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	D	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか アドバイザリー・パネルについては、2013年度において所期の役割を達成したとの判断がなされ、その後、目標自体が休止(取り止め)となっている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 当初は大学・学部のOBOG等と会合を持ち、一定のアドバイスを得ることに意義があった。しかしその後、第三者評価の仕組みなども整ったため、外部者評価とアドバイスという点では、その役割を終えた。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か アドバイザリー・パネル制度は初期の役割を達成したと考えられ、休止状態としている。今後、この制度の運用が必要となった場合には、その理念・目的について検討する。 また、2014年度中に、学部長の任期、学部長室会議のあり方について、商学部の「将来構想委員会」に諮問を行い学部執行部としては、学部長任期の延長を含めて大幅な改革を目指しているが、当面は上記委員会の答申を待つことになる。	☆
		その他	☆

目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 学部の使命・目的に照らして商学部の教育研究組織が妥当であるか否かに関し、ファカルティ・ディベロップメント委員会において継続的に検証し、2013年度は年2回開催された。更に、2014年度に入って直ちに、学部の各種委員会を大幅に整理した。とくに複数の「入試」関連の委員会を「学部入試委員会」に、また複数の「情報」関連の委員会を「情報システム委員会」に一本化し、近年とくに業務量の増えている両分野の組織運営を効率的かつ効果的なものとした。</p>	☆
		<p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ファカルティ・ディベロップメント委員会において定期的に検証されるようになった。更に、4月に一本化が図られたばかりであるが、とくに特定の担当者を置いていない執行部と「学部入試委員会」との間では連携の強化が実感できている。「情報」に関しても、学部長補佐(情報担当)が「情報システム委員会」の意向を汲み、具体的な施策の実行が目指されるようになった。</p>	☆
		<p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 上記両委員会の経験から、学部執行部と学部の各種委員会との「棲み分け」と「連携強化」が学部運営にあたってきわめて効果的であることが、あらためて明らかとなった。目標1に記載した「将来構想委員会」からの答申を待つて、さらに各種委員会の改編を検討する。</p>	☆
		<p>その他</p>	☆
備考			☆